

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 118 号

平成24年2月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「エデンのかけ橋 - モーク先生の教えと手紙」より（9）

第2部 バイブル・クラス週報「光の子達」 「光の子達」について

長谷川幸雄

ミス・モークのバイブル・クラスの週報として、「光の子達」が毎日曜日に発行され、集会者に配布されるようになったのは、昭和5年5月頃からであった。

巻頭にミス・モーク自筆のメッセージを載せ、ラフという用紙を使った、タブロイド判4頁のガリ版刷りだった。

2頁目には論説、クラス雑報、教会諸集会案内などが掲載され、3頁目は、新旧のクラスの会員の横顔 学校、会社、新聞社その他いろいろな職業における彼らの活動 の記事で占められていた。

第4頁は、先週のバイブル・クラスのこと、新会員の名前の紹介や出席者数、その他のことなどが詳細に述べられていた。

また、当時東大植物園の近く、白山御殿町の教会員の家で開かれた、毎週木曜日の夜の伝道集会へのボランティア活動のことなども記載されていた。その集会が始まる前、ミス・モークとバイブル・クラスのメンバーの何人かが、近所を太鼓を打ち鳴らしし讃美歌を

歌いながらまわって歩き、戸口ごとにガリ版刷りの案内状を配って、集会に来て下さいとさそったものであった。伝道集会では、ミス・モークがオルガンをひいて皆で讚美し、バイブル・クラスの若者たちが、代わる代わる立って、自分たちがどうしてクリスチャンになったかの証しをした。

「光の子達」は、2年余り続いて発行された。幸なことに小西牧師が、この週報を30数通保存していて下さった。小西牧師はミス・モークに心酔し、その巻頭言を宝物のように大切にしておられたのだった。

もし小西牧師がこのように週報を保存しておいて下さらなかったならば、「光の子達」について私たちがいえることは、それが存在したという憶い出だけであったろう。

(編者注)筆者、長谷川幸雄氏が編集・発行人であった。

最後の晩餐

ルカによる福音書 22 章 14 ~ 22 節

ローラ・モーク

わたしたちは、教会家族の一員としてここにまた、主の聖餐の儀式にあずかります。これはイエスご自身がはじめられた、記念の儀式です。イエスが十字架にかかる前の、最後の夜に、主は弟子達に申されたのです。「私が苦難に遭う前にあなたがたと、この過越の食事を共にすることを強く望んでいました」と。主は十字架にかけられる苦しみと辱かしめとに耐えるため、弟子たちと最後の食事をして、力づけと励ましを享けることを望まれたのです。主は弟子たちを愛しました。

主は彼らの愛と友誼を必要とされたのです。そうなのです。主はそれを強く望まれたのです。私たちの場合は如何でしょうか？ 私たちは私たちの兄弟や姉妹たちと共に、わが主の饗宴に列席して、食事を共にすることを強く願いますか？ 主の食卓について、そのような会食を享受できることに、私たちが熱望する力づけと、感動と、励ましなどを見出すことが出来るでしょうか。

私たちは、主と主のすべての弟子たちを熱愛し、お互い同士で「あなたと聖餐を共にしたいと熱望しています」と言いあえるわけです。私はそれが私の熱望ですと心から申せます。また主の聖餐の卓に出席して「大いなる過越しの宴」のパンを食べ、ぶどう酒を飲むことによって、あなた方ひとりひとりが励みを与えられ、力づけられるのを切望してやまないのです。

時がくればその日に私たちすべてが、神の王国で、主の食卓について食事を一緒にできるのです。

わたしたちに期待する主

ローラ・モーク

キリストはわたしたちの手に期待され、そのみ業を今日もなさせ給います。

キリストは、わたしたちの足が主のみあとに人を導くことを期待されます。

キリストはわたしたちの舌をもちいて、如何にして主は十字架にかかりたもうかを語らせ給います。

キリストはわたしたちを用いて、人々を主の傍らに誘わしめなさいます。

わたしたちの手が世俗の事柄にのみ忙がしく主のみわざの助けにならず、

わたしたちの足が、この世の罪業の誘いに乗って歩んでいるとしたら？

わたしたちの舌が、主の唇が唾棄するようなことばかりおしゃべりしているようなら？

そのようなことでどうして、主のみ業の手助けや再臨が早まるようにと願望できるでしょうか？

さあわたしたちみんなして、主のご期待にお応えしましょう。

主の要請

ローラ・モーク

わたしの今週のメッセージは、「光の子達」の読者へのお願いです。これはわたしのお願ではなく、神様からの要請です。ローマ人への手紙 12 章 1 節をお読みください。以下に引用しましょう。

「ですから兄弟たちよ、わたしはあなたがたと神の慈悲によって、あなたがたの身体をきよくきずなきいけにえとして神の御前にささげるようおすすめします。」

わたしはあなたがたの教師として、聖パウロと同じことをおすすめさせて貰いましょう。神はわたしたちの魂や心と共に、身体を神に捧げることを望まれます。神はわたしたちの全身全霊を要求されるのです。わたしたちは身体が間違った方向に向いながら、心だけで神に仕え、神を喜ばすことはできません。

魂と身体は、固く結ばれています。両者とも神に明け渡すことです。かりにわたしたちが俗世間に身をおいていれば、精神もまたそこに根をおろします。肉体が復活し、栄光を得るためには、肉体がこの地上で生活している間に、それを神に捧げなければならないのです。

それが真の聖別なのです。

キリストの霊は、わたしどもがこの身体を用いてくださいと捧げない限り、先に申した通り、私たちの身体を用いて働きを起すことはできません。主はわたしたちの手、足、眼、耳、口、生きている身体が、主のみ業のために日毎必要なのです。それで、わたしたちはパウロのようにまことに神の下僕となり、キリストの協労者となることができるのです。

ですからわたしがあなたがたにお願いして、神にすべてを捧げて下さるようにと願うのです。

祈りの時はいと楽し

ローラ・モーク

「神をおそれることは智恵の始めであり、神の誠めを守る者すべては良い理解力をもつ。」

すぐれた多くの科学者たちの聴衆が、マイケル・ファラデイの素晴らしい講演に完全に魅了されていました。1時間にわたってファラデイは磁力の本性と特質について、デモンストレーションをしました。彼のすぐれた聴衆たちは、すっかり夢中になって聴き入っていました。やがてファラデイは講演を終わりましたが、その終りに当って斬新かつ驚くばかりの実験でしめくくったのです。

演壇を降りて自席に戻ったあとも、しばらくの間、満場の拍手は鳴りやまず、当時のプリンス・オブ・ウェールズ、後にエドワード7世王となられた殿下が立ち上がって、お祝いの動議を提唱されたのでした。

動議は正式に採択され再び嵐のような拍手によって可決されました。しかし、そのざわめきに続いて会場内は、奇妙な静けさに支配されました。会衆はファラデイの応答を待ちかまえたのでしたが、彼は会場から姿を消していたのでした。

ファラデイは一体どうしたのでしょうか？その仔細を知っていたのはほんの二、三人の彼の親友だけでした。その人たちはこの偉大な化学者が、1化学者として以上の存在であることを知っていたのです。ファラデイは化学者であると同時に偉大なキリスト者でした。

ファラデイは、会員数20人足らずの小さな教会の長老でした。ファラデイが講演を終った時刻は、その教会での水曜日の祈りの集会の始まる時刻だったのです。その祈祷会を、彼は休んだことがありませんでした。それで彼は嵐の拍手の最中に、満員の会場を抜け出し、祈りの家に駆けつけたのです。

「祈りの時はいと楽し！ 祈りの時はいと楽し！」

教師の感化

ローラ・モーク

わたしがまだ少女で、アメリカのオクラホマ州ドーバーの家にいた頃のことです。わたしはいつも、母親と兄弟姉妹たちと連れだって日曜学校に通っていました。その頃のある時期に、わたしの組の先生が、あまり学歴のない貧しい農民であったことがあります。とは申しても大変に熱心で、また誠実なキリスト者なのでした。若い者たちはみんなこの先生を大好きで、しかも大変に尊敬していました。

ある夏のこと先生はわたし達に言ったのです。「若い人たちよ！この次の日曜日までに聖書の中の 2 節を暗記してきてください。コロサイ人への手紙 2 章 6 節と 7 節です。これからはこの聖句と一緒に暗誦してからおしまいにします。」

それでわたしは、先生の言いつけ通りにコロサイ書の聖句を暗記しました。次の日曜の日曜学校の授業の終わりに生徒一同は立ち上がり、頭を下げて、次の聖句をとらえました 「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあって歩きなさい。また、彼に根ざし、彼にあって建てられ、そして教えられたように、信仰が確立されて、あふれるばかりに感謝しなさい。」

少女であったわたしは、これらの聖句の深い意味を、十分に理解することはできませんでしたが、勉強して、それらの聖句を好きになりました。

のちに、それらの聖句の意味がより明確になったものの、その聖句を読みもせず、口にもしませんでしたが、その先生の神々しい顔つきが私の眼に浮ぶではありませんか。彼がおぼえて来なさいと聞いたそれらの聖句が、私に彼を思い浮べさせ、そのためにわたしの生きつづけるかぎり、わたしはその先生のことを決して忘れることができないでしょう。

わたしには彼の生涯がその聖句の通りであったことがわかるので

す。主イエスと共に歩み、彼が農場で鋤を使っている時も、主と共に歩んでいたのです。彼は樹木のように主イエスに根ざし、イエス・キリストの岩の上に堅く建てられたのです。彼は教えられた通りに信仰を確立したのです。

今わたしは、彼に代って、教えられた通りに信仰を堅く打ち立て、わたしの魂の教え子であるあなたがたに、キリストと共に歩み、主の信仰の上にあなたがたの生命を築くようにと願うのが私の祈りです。ぜひ、ひとつのたしかな、真実の生命であるイエス・キリストをあなたがたに説きたいと思います。